

信濃川水系学識者会議 第4回全体調整会議 議事要旨

開催日時：平成25年5月15日（水） 15:00～17:00

場 所：チサンホテル&コンファレンスセンター新潟 4階 「越後の間【東】」

議事次第： 1. 開会

2. 挨拶

3. 議事

①学識者会議規約改正について

②信濃川水系河川整備計画骨子に対する意見について

③信濃川水系河川整備計画（原案）及び附図の内容について

④信濃川水系河川整備計画（原案）に対する各部会で頂いたご意見について

⑤計画段階評価について

⑥今後の進め方について

⑦原案に関する意見聴取の方法について

⑧その他

4. 閉会

○議事

①学識者会議規約改正について

（座長）

➤ 改正について特に異議が無いため、5月15日付けで規約改正を承認する。

②信濃川水系河川整備計画骨子に対する意見について

➤ 特に意見無し。

③信濃川水系河川整備計画（原案）及び附図の内容について

④信濃川水系河川整備計画（原案）に対する各部会で頂いたご意見について

（委員A）

➤ サイクル型管理については、図を追加したのでわかりやすくなったが、整備計画と関連をつけて示す方が分かりやすいのではないか。例えばPlanは整備計画の目標、Doは整備計画の事業、Checkは日常の維持管理、Actionは次の計画へ向けた技術的知見の蓄積にあたるのではないか。これらを図の4つの部分に書くとわかりやすい。

➤ 小千谷地点の正常流量145m³/sに対して、観測期間の平均濁水流量が約200m³/sで正常流量より大きい流量であるにも関わらず、水環境の改善など流水管理が必要だとしている。P81では維持管理の面でどこに注意をして流水管理を実施するのが望ましいということをもう少し丁寧に記載した方がよい。

（委員B）

➤ サイクル型管理については内部チェックだけでなく、第三者機関による外部からのチェッ

クシステムが必要である。パートナーシップによる河川管理の展開について、もう少し具体的に説明した方がよい。

(委員C)

- 62 ページで大河津分水路を優先的に進め、上下流バランスを考えながら段階的に整備するというのは正しいと思う。その中で、既存ダムの有効活用についても原案に記載されており評価したい。上流部で洪水を貯めるということは流域全体に効果があるため、ぜひ早く進めてほしい。

(委員D)

- P61 に魚がのぼりやすい川づくりを推進しますと書いてあるが、サケが遡上できる川づくりをめざすため、「サケさかのぼる」という方向に記載してもらえないかという感想をもっている。

(事務局)

- 魚がのぼりやすい川づくりについては、これまでも魚道整備や改良に取り組んでおり、原案に記載のとおり今後も河川環境に配慮する旨記載しております。

(委員E)

- 小学生が河川とふれあう場が少なくなっているが、今回の計画では積極的に小学生と河川のふれあいについて展開していくと書かれていることから、安全を基本としたうえで、是非これを進めてほしい。また、河川は自分の育った故郷の誇りになるものであるので、誇りに思えるような環境整備を進めてほしい。

(委員F)

- 信濃川大河津資料館の運営について、市民団体や地域の方が集まり、積極的な活動を展開して下さり大変ありがたい。また学校等の見学対応に対しては出張所職員が対応している。今後は、大河津資料館に専任の館長、職員を置くなどして、市民の参加をより促すような資料館の運営・活用をしてもらいたい。
- 大河津分水路の改修が計画に位置付けられたことは評価できる。現在の分水路は河口に行くにしたがって川幅が狭くなっているが、当時の考え方として安全面を考えてこれで十分だと考えて狭くしているのか、それとも当時の財政面・技術面でやむを得ず狭くなっているのか聞きたい。

(事務局)

- 大河津資料館は様々な活動の拠点であると認識しており、出張所長など職員でも「館長」としてつとまることができるように、今後も市民団体や地域の方と密に連携した取り組みを進めていきたい。
- 大河津分水路の下流が狭いことについては、当時の財政的な制約に加え、河口部の山地部で地滑りがあり大規模な開削ができなかったことなど、技術面で限界があったと思われる。今後は先人が築いた技術を踏まえ、改修を進めていきたい。

(委員G)

- 下流部会では中ノ口川の直轄編入を要望する意見が多かったが、整備計画の策定後に状況の変化が生じた場合には、計画の見直しを行うことができるような意見を案の中には取り

入れてもらえるのか。

(事務局)

- 下流部会での議論を踏まえ、河川整備計画（案）に反映していきたいと考えている。

(座長)

- 信濃川沿川の住民がいろいろな形で河川に関わっているが、どの程度住民が関わっているかをモニターする仕組みを作り、その結果を踏まえて、より住民が関わっていける取り組みを実施してほしい。

(委員H)

- 下流部会では、原案全体としては肯定的な評価をしている。特に大きな項目としては、30年という長いスパンの中で優先順位の考え方や上中下流のバランスを念頭に置いた計画が必要であるとの意見がでた。また、外水氾濫防止のため、市街地の浸水を防ぐためのポンプの運転調整をせざるを得ないという現実があるが、非常に深刻な問題であり、今後も適正に調整を進めていく必要がある。
- 下流部の治水計画は大河津分水路が機能していることが前提であるため、分水路下流区間の流下能力確保が極めて重要である。
- 大河津分水路の果たしている役割を多くの方が認識していただくことは非常に重要であり、大河津資料館の役割は非常に重要である。大河津分水路は、日本の代表的な治水であり、その象徴的な存在であるので、地域住民だけでなく全国に広く伝承する役割がある。また、新潟市歴史博物館では信濃川の治水を行いながら発展してきた新潟のまちの歴史について展示されているので、大河津資料館と同様に役割は大きい。

(委員F)

- 鳥屋野潟は信濃川水系、阿賀野川水系とつながっているという認識は非常に低い。大河津分水路の役割は鳥屋野潟にとっては不可欠です。大河津分水路があって、鳥屋野潟の排水機場があって、そして鳥屋野潟に水を集めて掻き出している。越後平野、信濃川水系、阿賀野川水系を含め河川全体の関連を捉え、計画を進めてほしい。

(委員I)

- P41の「アカヒレタビラ」は、「キタノアカヒレタビラ」とすべきである。
- P76の水衝部の対策の中で、「水衝部（みお筋）」とあるが、水衝部とみお筋は別の事象であり同列の言葉として使われるのは違和感がある。

(事務局)

- 表現については修正する。

⑤計画段階評価について

(委員J)

- 大河津分水路の河積が不足しているとのことだが、土砂の掘削量、事業費はどれくらいを見込んでいるのか。

(事務局)

- 河積の不足について、流量に置き換えて説明すると、平成23年の新潟・福島豪雨では大

河津分水路で概ね 8,300m³/s 程度流下したが、この流量が今の河道で限界であり、整備計画で目標としては 9,800m³/s まで流れるように改修しようとしている。事業費については現在精査しているところで、次回の会議で説明する。

(委員 A)

- 大河津分水路の整備は、古い時代の技術ではできなかったが現在は技術の進展により可能になったといった技術的なバックグラウンドや、掘削する規模といった数量的な説明を合わせて示した方がよいのではないか。

(事務局)

- 次回の会議でどういった検討を実施しているかといったところを説明したい。

⑥今後の進め方について

⑦原案に関する意見聴取の方法について

(委員 J)

- 計画案ができる時期、次回の学識者会議、整備計画の策定期間は具体的に何月頃か。

(事務局)

- 関係機関との協議もあり明確には言えないが、今年度中をひとつの目処と考えている。

⑧その他

(委員 D)

- 原案の 97 ページに大規模地震発生後の対応があるが、大規模地震発生前に対応するべきことがあるのではないか。千曲川の歴史的 3 洪水のうち 2 つは地震に伴うせき止めと決壊が原因と見られている。立ヶ花の狭窄部でも活断層によって河床が盛り上がり、せき止められて氾濫したということを繰り返してきた。このような過去の地震を知って日頃から備えることも大切である。

(事務局)

- 大規模地震への対応として堤防強化も重要と考えており P71 に記載している。河川管理施設の耐震性能照査を行い、必要な耐震対策を実施する。また、過去の地震でどのような被害があったのかということも念頭において優先順位を決めて取り組みたい。

(委員 C)

- 原案 P59 の図 35、36 の数字と注意書きについては、P70 の既設ダムを活用で立ヶ花地点で 7,600m³/s を洪水調節施設により 7,300m³/s になると記載されていることに対応していると思うが、300m³/s 流量を上流で貯留するということを明確に分かりやすく記載することはできないか。

(事務局)

- 記載の仕方については関係機関との調整もあるため、検討させてもらいたい。

以上